

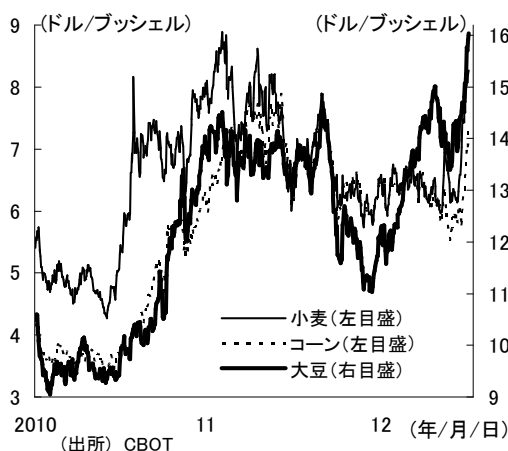


米国穀倉地帯が高温少雨

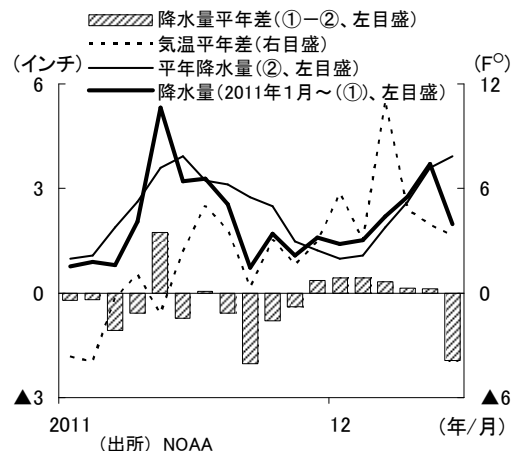
～ 急速に悪化する作柄判断 ～

- (1) 7月第2週に入り穀物価格が一段高(図表1)。週初、大豆は1ブッシェル当たり16ドル台乗せ、コーンは同7ドル台乗せ。小麦も同8.3ドルに乗り、既往最高値の8ドル台後半に近接。
- (2) 穀物価格急騰の主因は、中国やインド、ロシアなど主要生産国の旱魃。加えて、3カ国に次ぐ生産量を誇り、世界最大の穀物輸出国である米国の高温少雨(図表2)。年初の暖冬来、例年を大きく上回って気温が推移。一方、降水量は昨年未雨、ほぼ例年並みで推移してきたものの、6月に入り大幅減。主要3カ国と同様、深刻な旱魃に直撃。
- (3) 5～6月は作付け。さらにコーンの場合7月初は受粉期。今期の収量を左右する重要な時期での高温少雨は大打撃。その結果、毎週公表される作柄判断が急速に悪化(図表3)。総じて5月末～6月初の時点では昨年を上回る作柄が見込まれ、好調なスタート。しかし6月に入ると、週を追って作柄判断が悪化。6月3日時点と最新の7月8日時点とを対比すると、コーンでは「良い」と「とても良い」の合計が72から40にほぼ半減。同様に大豆では65から40、牧草では46から21へ。一方、「悪い」と「とても悪い」の合計では、まずコーンは5から30、大豆は6から27、牧草は22から50へと、いずれも大幅に増大。
- (4) エリア別にみると穀倉地帯のグレートプレーンズに加え、南部のケンタッキー・テネシー州、中西部のミズーリ・インディアナ州でも作柄判断が深刻な悪化。さらに大豆やコーンでは作柄判断の最多が依然「良い」で維持されるのに対し、牧草では最多が、6月24日と先週の7月1日にそれまでの「良い」から「まずまず」に移り、7月8日には「悪い」にシフト。今後、肉類でも値上がりの公算大。今後、天候不順が好転しない場合、一次産品発のインフレ圧力が、このところ各国で拡がってきた金融緩和に向けた動きを阻害する展開が視野。

(図表1) 小麦、コーンと大豆価格の推移



(図表2) 米国グレートプレーンズの降水量



(図表3) 米国主要生産地作柄判断

